

巻頭言

Foreword

常務執行役 開発本部長
近藤賢二



新年明けましておめでとうございます。

平素は“三菱電機技報”をご愛読いただき、ありがとうございます。“技術の進歩特集”号の発行に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

三菱電機グループは、“成長性”“収益・効率性”“健全性”の3つの視点による“バランス経営”を継続し、強固な経営体質構築と持続的成長の更なる追求を進めています。そして、遅くとも2020年度までに達成すべき目標として連結売上高5兆円以上、営業利益率8%以上を掲げています。このために必要な“もう一段高いレベルの成長”の実現に向け、さらに2020年以降の“更なる成長”に向け、その要となる研究開発を推進しています。将来の安全・安心で持続可能な社会の実現を目指し、困難でリスクのあるテーマにも失敗を恐れず、積極的に挑戦し続けてまいります。

ここで、研究開発の考え方について申し上げます。三菱電機では研究開発を短期、中期、長期の視点で捉え、推進しています。例えば現製品の強化、その次やその次の製品への新技術構築に対応し、さらに、この時間軸の延長線上にある将来製品の基盤となる先進技術を開発してまいります。これらの技術については、引き続き着実に研究開発の歩みを進めてまいります。これに加えて、未来のあるべき姿の実現に必要な技術や、パラダイムシフトによって当社の事業に大きな影響を与える破壊的技術など、今の延長線上にはない技術が存在します。将来を俯瞰(ふかん)して未来社会の姿を描き、その実現に必要な技術を考えるバックキャストにより、今始めなければならないアイテムを定め、開発に取り組んでまいります。同時に、今までの概念を一新するパラダイムシフトを起こす破壊的技術があります。当社は、世界情勢や先進技術に対して常にアンテナを張り巡らせ、感度を高くして探り続けています。これらを推進するに当たっては、自前主義に固執してはいけな

いと考えています。世の中の動きのスピードや、製品・サービスの対象範囲の拡大、技術そのものの範囲の爆発的拡張は、当社の技術範疇(はんちゆう)や能力をはるかに超えています。そこで、国内外の大学やベンチャーを含めた企業などの社外の知恵や技術、人材を活用するオープンイノベーションを通じて、新たな一步を踏み出し、当社にないものを取り込んでスピード感ある開発を推進してまいります。

研究開発の出口として、これからは世の中に対して機器単体のみではなく、関連するサービスも合わせて提供することで、これまでにない生活や社会スタイルを作り出す取り組みが必要と考えています。私はこれを、卵の黄身と白身に例えています。卵は大きさによって、S, M, Lがありますが、実はそれら黄身の大きさは同じなのだそうです。当社はこれまで黄身を作ることを、すなわち、機器を作ることを事業の中心としてきました。これからは、おいしい黄身を作ることはもちろんですが、それだけでは足りません。運用や保守、付加サービス、すなわち白身の部分も大きくして、お客様にLサイズの卵として喜んでいただけるようにしなければいけないのです。これが卵としての価値を高め、グローバルで勝っていくためのビジネスの方向だと考えます。

当社は黄身に相当する“ものづくり”にたけており、良いものを作って世界に貢献していきたい、お客様に喜んでいただきたいというDNAのようなものを脈々と引き継いでおります。これを私は“三菱電機のコード”と呼んでいます。今後も堂々と三菱電機のコードを守り続けながら、白身の部分、すなわち“ことづくり”に関しても、お客様の新たな価値づくりに寄与できるよう努力してまいります。

当社は、2020年、そして更に先の20年後、30年後も見据えて、“変える”勇気を持ち、“変わる”努力を続けてまいります。これからも、当社にどうぞご期待ください。

最後になりましたが、改めて皆様のご健勝を祈念し、新年のご挨拶とさせていただきます。